

教員養成大学1年次学生における音楽理論学力について 実態調査とその背景分析からの一考察

About The Music Theory Scholastic Ability at 1 Annual Student in The Teacher-training University
: A Study of From The Actual Condition Survey and The Background Analysis

高久新吾*・佐藤有起**

【研究の概要】

教員養成課程におけるより効果的な音楽理論教育実践のための一助となる基礎的知見の集積を目的として、浜松学院大学現代コミュニケーション学部、子どもコミュニケーション学科平成24年度一年次必修科目「音楽」の受講者73名を対象に、音楽教育歴および音楽活動歴を調査し、それら背景因子と音楽理論学力との関係について解析を試みた。73名のうち中学校3年次に音楽教育を受けた者は72名という結果であったが、それらの中で、更に高等学校で3年間の音楽教育を受けた者が7名(群)、2年間で5名(群)、1年間36名(群)および音楽教育を受けていない者が24名(群)であった。講義中に実施した3回の単元確認テストおよび前期学期末試験の得点を学力の指標として、群～のそれぞれの得点平均を比較したところ、いずれの試験においても音楽教育歴が長い群の方が得点平均は高かった。群と群については3回の単元確認テストのいずれにおいても統計学的な有意差が認められた。

また、音楽活動歴については、楽器演奏等何らかの音楽活動経験者が45名、未経験者が28名であった。また、ピアノ(鍵盤楽器等)経験者は40名、未経験者は33名であった。これらの母集団における試験得点平均について比較解析を行ったところ、音楽活動歴および鍵盤楽器経験歴のいずれにおいても、経験者の試験平均点は未経験者のそれに比べて高得点を示した。2回目の単元確認テストでは、ピアノ歴の有無間での得点平均の差に統計学的な有意差が認められた。さらに、ピアノ歴のみを有する30名について、経験年数と試験得点の間に正の相関が認められた。以上の結果より、音楽教育および音楽活動の経験年数が長い・豊富な学生、すなわち、音楽に対する関心が高い学生ほど音楽理論学力が高いという一定の傾向が確認された。このことから、音楽理論学力の向上のためには、器楽演習等を併せて活用するなどによって学生の音楽に対する興味意識を高揚させ、自発的・継続的な学習意欲をかきたてることが効果的であることが示唆された¹⁾。

一方近年、核家族化、夫婦共働きといった社会構造の変化から、保育園に入れにくい待機児童の問題が深刻化している。また、昨今では、夫婦一組当たりの子ども数の減少に伴って、質の良い教育を受けさせたいという保護者意識も強まっている。これらの社会背景の

* 浜松学院大学(音楽教育学)

** 浜松学院大学(非常勤講師)

変化に対応するためには、より質のよい保育者・教員を育成・確保し、乳幼児・子どもの情操教育をより一層充実させていくことが求められる。情操教育の重要な一部である音楽は、子どもの日常生活において密接な関わりを持っており、切っても切り離すことはできない。音と子どもの関わりについてみると、多少の個人差はあるが一般的には乳幼児期の音を聞くことに始まり、やがては全身で音やリズムを感じ取り、行動表現や楽器などを演奏できるようになっていく²⁾。

音楽を通じてこれら情操形成を担う保育者・教員の能力について言えば、例えば、幼稚園教育要領の第2章ねらい及び内容の「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い創造性豊かにする」ことが指導の目的とされている³⁾。また、小学校学習指導要領では、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことが目標として掲げられている⁴⁾。

これらの事項を円滑に執り行う保育者・教育者には、それ自身が音楽表現豊かであり、美しい音を奏で、愛好する心を持って指導に臨めることが望ましい。この場合、保育者や教育者は旋律の美しさ、和音の響きや調性感などにも十分注意し、その楽曲に組み込まれた内容を正しく読み取り演奏する必要がある。しかし、実際の現場では、調性感を持たない主和音のみの左手伴奏などのケースも見受けられ、保育者・教育者の音楽能力は十分とは言い難い。従って、教員養成大学においては、実技指導はもちろんのこと、唱歌表現・楽語・音程音階・コードネームなどいわゆる音楽理論教育にも一層注力する必要がある。

また、実際の教員採用試験にはほぼ必ず音楽理論から難易度の高い問題が出題されている傾向がある事を考えると、合否、すなわち年次教員数確保という視点からも音楽理論学力の向上は教員養成大学における重要課題であると言える⁵⁾。しかしながら、大学在学中における音楽理論に関する講義時間は、1年次通年の「音楽」のみのわずか30講義（1講義=90分）である。その中で音楽理論の基礎を十分理解させ、これを教育現場で使えるよう導かねばならない。その一方で、わが国の音楽教育は小学校に始まり、高等学校では選択制であるなど、入学以前の学生の音楽教育歴についてはまちまちである。楽器演奏等の音楽活動歴についても個々で異なっている。

保育者・教育者として社会に送り出す責務を担う教員養成大学は、このように音楽背景の異なる学生を受け入れているのが現状である。従って、入学以前の音楽教育や音楽活動が大学での音楽理論学力にどの程度影響を及ぼしているのかについて把握しておくことは、より質の高い音楽理論教育を実践し、学力を向上させるための基礎的知見として有用であると考えられる。そこで本研究では、より効果的な音楽理論教育のあり方について模索するため、大学1年次「音楽」受講学生における音楽理論学力について実態調査と背景因子分析を試みた。

【方法】

対象

浜松学院大学現代コミュニケーション学部、子どもコミュニケーション学科平成 24 年度一年次必修科目「音楽」受講者 73 名（男子 23 名、女子 50 名）を対象とした。

学力評価および実態調査

講義は平成 24 年度 4 月 13 日から 7 月 31 日の間で計 15 回行い、学力評価として 3 回の単元確認テストおよび 1 回の前期学期末試験を実施した。単元確認テスト 1 は「音名とその鍵盤の位置関係」について、単元確認テスト 2 は「音符・休符の名称と長さ」について、単元確認テスト 3 は「音程」について、前期期末試験はそれらを全て含む総合テストである。試験問題は講義でテキストとして使用している「やさしく学べる音楽理論 桶谷弘美 他共著」音楽之友社 から出題した。

講義最終日に表 1 に示すアンケートを実施し、音楽教育歴および音楽活動歴についての実態調査を行った。

表 1 . 音楽教育歴および音楽活動歴調査票

. 学校での音楽について	
中学 3 年生の時に音楽の授業を受けていましたか？	はい・いいえ
高校 1 年生の時に音楽の授業を受けていましたか？	はい・いいえ
高校 2 年生の時に音楽の授業を受けていましたか？	はい・いいえ
高校 3 年生の時に音楽の授業をうけていましたか？	はい・いいえ
高校までの音楽の授業で印象に残っている事があれば聞かせて下さい。()
. プライベートでの音楽について	
音楽歴がありますか？	はい・いいえ
「はい」と答えた方、何をどのくらいの期間やっていましたか？	_____を_____年間
. 理論について	
大学入学以前より楽譜が読めましたか？	はい・いいえ
ト音記号・ヘ音記号について	聞いたことがない・聞いたことはある・理解している
・ ・ ♯ について	聞いたことがない・聞いたことはある・理解している
音符や休符の名前や長さについて	聞いたことがない・聞いたことはある・理解している
拍子記号の意味や役割について	聞いたことがない・聞いたことはある・理解している

統計解析

試験得点の解析には、試験時間内に試験を終了できた学生のみを評価対象とした。また、統計解析ソフトには SPSS 15.0J (エス・ピー・エス・エス日本株式会社、東京) を

用いた。試験得点は正規分布に従うと仮定し、関連のある2群間および関連の無い2群間の試験得点平均値の比較は、それぞれ、対応のある *t* 検定および対応のない *t* 検定を用いて行った。無関係な多群間の比較は一元配置分散分析およびその後の Tukey 検定により行った。また、音楽活動年数と試験得点との相関は回帰分析により解析した。いずれの場合にも $p < 0.05$ を統計学的に有意であると判断した。

【結果】

音楽教育歴と試験得点との関係

試験対象者の中学3年から高校3年までの音楽教育歴について調べたところ、表2に示す結果を得た。対象者73名中72名が中学3年次に音楽教育を受けており、受けていない学生はわずか1名であった。そこで、中学3年次に音楽教育を受けている72名について、さらに高校3年間（群Ⅰ）、2年間（群Ⅱ）、1年間（群Ⅲ）および無し（中学校のみ；群Ⅳ）に分類した。

表2．対象者の音楽教育歴背景および解析群設定

中学校		教育歴背景			人数	群設定		
3年次	1年次	高等学校		人数		高校時教育	人数	群
		2年次	3年次					
Y	Y	Y	Y	7	3年間	7	I	
Y	Y	Y	N	2	2年間	5	II	
Y	Y	N	Y	2				
Y	N	Y	Y	1	1年間	36	III	
Y	Y	N	N	33				
Y	N	N	Y	3				
Y	N	N	N	24	無し	24	IV	
N	N	Y	Y	1				

Y: 教育歴有り, N: 教育歴無し

これらの群について、3回の単元確認テストおよび前期学期末試験における試験得点分布と平均点(±SD)を図1に示した。いずれの試験においても各群の試験得点平均は右下がりとなり、すなわち、音楽教育歴が長い群の方が得点平均が高いという傾向が認められた。単元確認テスト1~3においてはいずれも群Ⅰと群Ⅱの間に有意差が認められた。また、単元確認テスト3では群Ⅰと群Ⅱの間に有意差が認められた。前期学期末試験においては群間の有意差は認められなかった。

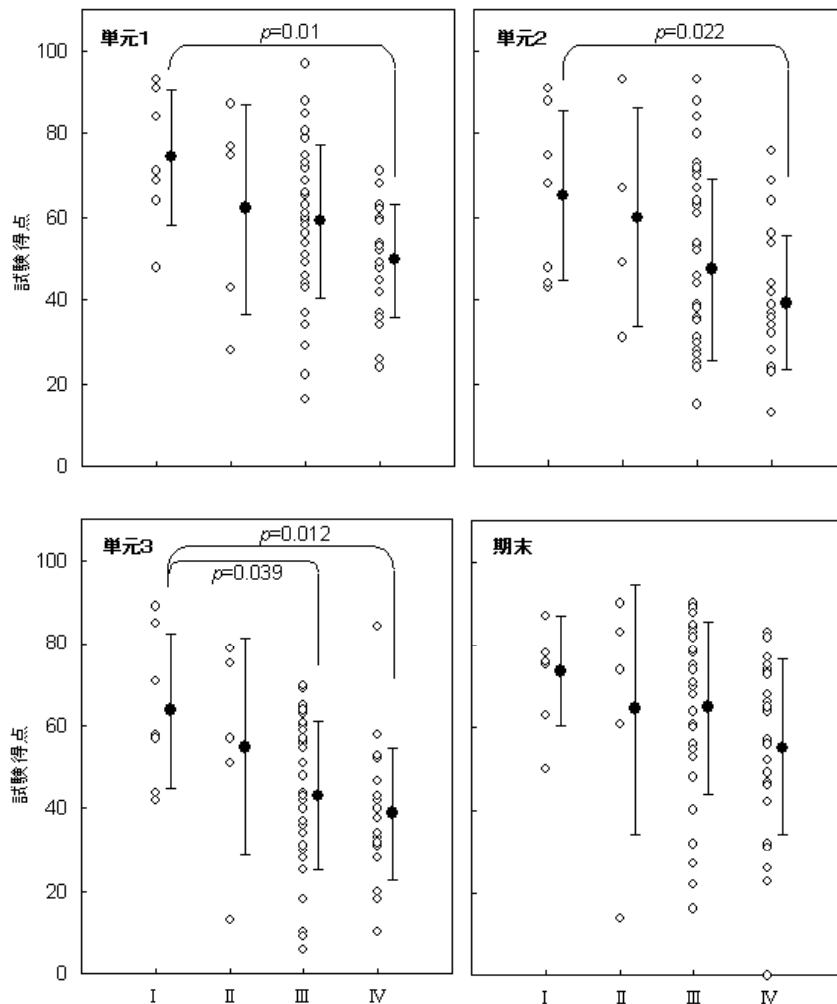


図1. 音楽教育歴と試験得点との関係. 各群 ~ は表2に対応.
 ○: 各人の試験得点, ●: 各群の平均±SD

音楽活動歴と試験得点との関係

対象者の音楽活動歴背景について調べたところ、表3に示すように、何らかの音楽活動経験を有する学生は45名、全く音楽活動経験が無い学生は28名であった。また、ピアノについては経験者が40名、未経験者が33名であった。そこで、これらの母集団における試験得点平均について解析した(表4)。その結果、音楽活動歴およびピアノ歴のいずれに

においても、経験者の試験平均点は未経験者のそれに比べて高得点を示す傾向が認められた。鍵盤歴・単元確認テスト2については経験の有無の間に統計学的な有意差が認められた。

表3．対象者の音楽活動歴背景とその人数

		ピアノ(鍵盤)		
		有り	無し	計
鍵盤 以外	無し	30	28	58
	管楽器	5	0	5
	弦楽器	3	3	6
	打楽器	0	1	1
	その他 ^{*1}	2	1	3
	計	40	33	73

*1: 吹奏楽1、ミュージカル1、不明1

表4．対象者の音楽活動歴および鍵盤歴と試験得点との関係

背景	試験	経験有		経験無		p値
		平均	SD	平均	SD	
音楽活動歴	単元1	59.9 ± 17.9		55.3 ± 19.6		0.623
	単元2	51.0 ± 22.4		42.4 ± 18.8		0.052
	単元3	46.4 ± 20.4		42.0 ± 16.9		0.186
	期末	64.0 ± 22.4		60.1 ± 19.0		0.211
鍵盤歴	単元1	61.7 ± 17.6		53.8 ± 19.4		0.749
	単元2	52.0 ± 23.0		42.2 ± 18.3		0.009
	単元3	47.6 ± 20.8		41.3 ± 16.8		0.149
	期末	65.9 ± 21.9		58.5 ± 19.9		0.893

次に、活動年数という背景因子を含めた検討を行うため、ピアノ（鍵盤）のみの経験を有する30名のうち年数不明の1名を除く29名の集団において、年数と試験得点との相関を調べた。その結果、単元確認テスト1については年数と得点との間に有意な正の相関が認められた（図2）。しかし、単元確認テスト2、3および前期期末試験については有意な相関は無かった（データ示さず）。

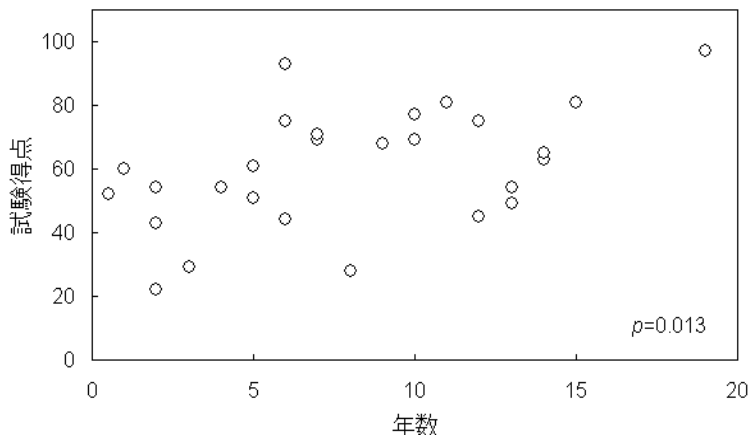


図2．ピアノ（鍵盤）経験年数と単元確認テスト1得点との関係

【考察】

本研究では、浜松学院大学現代コミュニケーション学部、子どもコミュニケーション学科平成24年度一年次必修科目「音楽」受講者73名について、高等学校で音楽教育を受けている学生、また、その年数が長い学生ほど音楽理論学力が高いという傾向が見出された。音楽教育歴が音楽理論学力に影響する理由としては、高等学校での経験者は中学校のみの学生に比べて、音楽教育が持続的に施されている（記憶持続性）ためである可能性がまず考えられる。

小学校学習指導要領では、音楽理論教育については、小学6年生までに表現・鑑賞の両方面より、音符・休符・記号・速度・強弱・和声の響き・音階や調・拍子など、音楽にかかわる用語について、その学習において取り扱うよう記載されている⁶⁾。また、中学校における音楽理論教育については、小学校学習指導要領第2章第6節音楽の第3の2の(6)に示す「音符・休符・強弱記号・拍子・五線と加線など」音楽にかかわる用語に加え、速度記号・和音・音階・調をその学習において取り扱うよう中学校学習指導要領に記載されている⁷⁾。

これに対して高等学校では、中学校音楽科との関連を考慮したうえで、「音階を選んで旋律をつくり、その旋律に副次的な旋律や和音などを付けて、イメージをもって音楽をつくること」、「音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの校正を工夫して演奏すること」、「音楽を形づくっている要素の働きを変化させ、イメージをもって変奏や編曲をすること」とあり、中学までの音楽理論知識なくしては学習困難であろう編曲や作曲導入などをその学習において取り扱う記載がある⁸⁾。さらに高等学校の音楽選択制では、生徒の特性、地域や学校の実態などを考慮して、その学習内容を担当教諭が考案した授業カリキュラムに置き換えることができる。つまり知的好奇心が高い生徒が多い学校では、学習指導要領の内容にとどまることなく、さらなる段階への学習が可能である。したがって、高等学校での教育歴が大学での音楽理論学力に大きく影響していることは十分にあり得る。

本研究においては、楽器演奏等の音楽活動の経験者は、未経験者に比べて音楽理論学力が高いという傾向が見出された。また、ピアノ歴については経験年数が高い程学力が高いことがわかった。これは、自発的な日常の音楽活動において譜面を読むなど音楽理論に関するスキルが継続的に維持・練磨されているため（継続的学習）であることは想像に難くない。

しかしながら、本研究で実施した単元確認テストのうち、1と2については中学校までに学習する内容に関する出題であるが、本講義で初めて学習する知識を問う単元確認テスト3においても、高等学校での教育歴に応じた得点平均の群間差が認められた。また、音楽活動歴についても、有意差は認められないものの単元確認テスト3において経験者と未経験者の間に学力差があった。この結果は、大学における講義の学習能力そのものにも群間差があることを示唆しており、上述の記憶持続性および継続的学習という理由のみでは

説明できない。

高等学校での音楽教育は選択制であることから、高等学校において音楽教育をより多く受けた学生は音楽に対する興味・意識が高いものと考えられる。また、自発的な音楽活動を行っている者も当然ながらそうである。すなわち、音楽に対する関心の高さが講義における学習態度に反映し、学力に影響している可能性が考えられる。実際に高校教師へのヒアリングにおいて、高等学校においても音楽に対する興味が高い生徒ほど学習態度が良いというコメントを得ており、この可能性を裏付けるものと思われる⁹⁾。

以上のことから、音楽理論学力の向上のためには、器楽演習等の実技レッスンを併せて活用するなどによって学生の音楽に対する興味意識を高揚させ、自発的・継続的な学習意欲をかきたてることが効果的であることが示唆された。

今後は、講義開始時の学力評価を実施することを加えて、毎年度の調査を行うなどによって統計学的な解析対象者数を累積し、検討・解析していくことが必要課題であろう。

【参考文献】

- 1) 伊藤誠「[音楽指導法A]における音楽理論教授の必要性 - 質問用紙調査の分析結果をふまえて埼玉大学紀要 教育学部(2012)
- 2) 中山由里「ピアノ教育導入期における授業についての一考察 -ピアノ学習初心者への講座を通して九州女子大学紀要 人間発達学科(2007)
- 3) 新海節「保育士及び幼稚園教諭養成校のピアノ指導における一私見」帝京学園大学紀要(2005)pp.1-2

注

- 1) 羽田真由美「保育者養成校の課題と問題点-質問紙調査結果の分析から-」鳥取短期大学研究紀要(2004) p.60
- 2) 岩崎光弘 リトミックとこどもたち「リトミックってどんな教育」(2001)
- 3) 幼稚園教育要領 平成20年3月 文部科学省 p.8
- 4) 小学校学習指導要領解説 音楽編 平成20年8月 文部科学省 芸術出版社 p.7
- 5) 浜松市私立幼稚園教員採用審査等
- 6) 前掲書 pp.48-49,65
- 7) 中学校学習指導要領解説 音楽編 平成20年9月 文部科学省 芸術出版社 p.67
- 8) 高等学校学習指導要領解説 芸術(音楽 美術 工芸 書道)編 平成21年 p.16
- 9) 静岡県公立高等学校音楽教諭 水田玲美 インタビュー調査